

ment 2005-2014)」を定め、各国に持続可能な開発の実現に必要な教育への取り組みと、国際協力を積極的に推進するよう働きかけている。

それを受けて、フィンランド教育省は、高等教育において「持続可能な開発のための教育」を検討しており、それをまとめたのが本書である。フィンランドは、流行の小さな政府政策に背を向け、福祉国家政策を長い間取り続け、また OECD が実施した PISA において学力世界1の国として注目された。評者は、そこでどのような高等教育政策がとられているのか、興味を持って来た。教育省が刊行した本書を通じて、何らかの知見を得るのが、本書を読む動機づけである。

第1章から第4章で、高等教育における持続可能な開発の取り組みを論じている。第1章では、元教育相が執筆し、持続可能な開発と、国連、EU、フィンランド政府のかかわり合いを紹介している。評者は、当初「持続可能な開発」についてほとんど知識がなく、その言葉の意味すら正確に理解できなかつた。読み進めていくと、「開発」は経済成長、経済発展、経済的利益と深くかかわり、他方「持続可能性」は、環境、文化、民主主義、健康、社会的福利などの概念が関連することと思うようになった。もちろん異なる解釈が可能であることは言うまでもない。

第2章では、持続可能な開発が、1つの国だけの問題ではなく、国際的・社会的事業であること、また現在の世代だけではなく、将来何世代にもかかわりのある問題であること、さらに1つの研究領域ではなく、学際的な性格を有することが、論じられている。

第3章では、開発に対して「価値重視アプローチ」と「軽いアプローチ」があることが紹介されている。「価値重視アプローチ」では、経済成長だけを目的とした経済成長を目指すのではなく、それとは別の節度ある経済成長を目指すべきであると主張する。他方功利主義的な「軽いアプローチ」では、開発の確保と繁栄の増進が、最も大切だと見なす。ここで著者はどちらの立場が正しいかの判断には、慎重である。

第5章から第8章までは、持続可能な開発のための科学教育を検討している。第9章から第13章までで、教員養成、ビジネススクール、環境学などでの持続可能な開発との関連を検討している。最後の第14章15章でまとめを行っている。

本書は政府報告書であり、決して面白い読み物ではない。また研究書と異なって、精緻な理論と、豊富なデータに基づいて論を進めているわけでもない。しかし内容

フィンランド教育省編著  
齊藤博次・開龍美監訳

『フィンランドの高等教育 ESD への挑戦—持続可能な社会のために—』

(明石書店, 2011年, 208頁)

丸山 文裕 (広島大学)

国連は「持続可能な開発のための教育の10年 (2005-2014年) (UN Decade of Education for Sustainable Development)

には含蓄があり，確かにと頷いてしまう箇所も少ない。

最後に，日本では必ずしも広く知られているわけではない「持続可能な開発のための教育」に，早くから注目し，翻訳に携わった岩手大学のプロジェクトチームに敬意を表したい。